



Kurt Gödel

1906 - 1978

緑の園

松本嘉夫

教養部に奉職して、図書館（旧）内の一室（教員閲覧室）を臨時の居室として与えられたが、初めて担当する“化学”という講義の準備のためにこれ以上お誘え向きの所はなく、裕福な気持で講義準備ができたし、職業ぬきでも常住丸善の店に居る心地がした。お茶の支度も賜わり、幸せな一年であった。その私の居室が全校を通じて緑の運動場に最も近い部屋であって、窓を開けると虫の音や奏楽練習の音が驚くほど近くから聴こえて来る、という事から始まる話である。

嘗ての年月、この相模のグラウンドの草のコオログと北里大学NCOジャズクラブのコオログさんの声が風に乗って、奥まった衛生学部五階の窓に運ばれて来たものであった。両者の交わり合ったしらは、風の抑揚に加減され乍ら、吾が身の忙閑にかかわりなく、周囲の季節のめぐりを知らせてくれた。

NCO（ニュー・カウント・オーケストラ）クラブは私が十年以上部長をしていた（現部長は野村廣之先生）が、その間、強烈な音響の発生主としてどこの学舎からも練習場の接近を迷惑がられた。何とか、文化会部長会議というものが生きていたお蔭で、他の音楽部と共に、グラウンドの南端に、雨露を凌ぐ程度のプレハブ練習場を建ててもらえた。（其の後、現学生ホール建設の際に立案・計画の委員会の委員であったので① 何よりも先づ中央に演奏会場、演劇舞台、両方の練習場、の三つを兼ねた防音のセンターホールを作る、② それを取り巻いて広い廻廊を設け、廻廊

は壁面に絵画、写真等を展覧できる美しいさろんにする、ことを強唱する意見を提出し、相応に尊重して下さる方が居たと聴いた。②は現学生ホールに生きたが、今も①を希む。）

プレハブの狭い練習場ではあったが、膨張の心しない駐車場ベルトによって、今日のように隔離されず、グラウンドの緑がすぐそばまで続いていた頃の話である。其処で練習を開始するクラブの新入生の半数以上が初心者であったが、新人達の間延びした練習音が春風に送られて来る頃、コオログの子が昼の世界に迷い出て床を歩いているのを一年生の一人が見つけた。まだコオログの子か、蟻の子か、ごきぶりの子か、容易に判別し難い小さい姿をしていて、その全身を熟視熟考の末に漸くコオログの子に違いないとわかった。

一年生が夏の合宿に出発するときには、叢の中に、もう立派な少年に成長しているコオログの姿を見かけた。合宿中に合奏のメンバーに昇格した一年生も含めて、合宿後から秋の終りにかけて、シーズンの棹尾を飾る学外コンサートを目指して、夜毎の練習のうたげが闌々となる。

その頃はもう、相模の草のコオログのすだく声の高まりは伸びしきった夏草の丈よりも高く、ふりしぼる魂の振動が草深いグラウンドの土を震はせる。両者の一途の奏楽の交わり合いを、秋の夜の霖雨の雨足の間をとおして聴く人があれば、彼等の生命の秋の夜のあわれさを深く心に沁みて感じたに違いない。

「愛しいNCOの一年生コオログさん、練習の音の中でも秋が深まるね。」「相模の草

のコオログさん、聴いてくれるの？私たちもあなた達も春に生れて秋に鳴く。同じ定めよ。」「君達の場合は演奏の音を聴いて異性がとにもかくにも近づいて来るというのではないのね」「草のコオログさんは本当に異性を呼んで鳴いているの？楽しいの？それとも悲しいの？」「そんなに簡単に云える気持ちじゃないね。体のホルモンのサイクルの進む音がきこえるような気がするんだ。その音をきくのがとても不安なんだ。それで音楽を弾くんだが、しらべを奏でていると、楽しいのか悲しいのか自分でもわからなくなってくるのさ。NCOのコオログさんはどうなの？」「私がやっているのはきっとNCOに入っているからよ。シーズンの終わりには演奏会があるからよ。ホルモンの足音の話は今考える余裕がないから後でよく耳をすまして聴いてみることにするわ。」「六本木の会場に行っても相模の草忘れないでね。」「でも私達はカウント・ペーシーに向かって進むのよ。」理想がいいね。ローカルは駄目だ。だけど私達の影は君達にどこまでもついて行くよ。君達が成功を手にするときはきっとその中に私達の影が住みついているよ。」「有難う。相模の草のコオログさん。」「左様ならNCOの一年生コオログさん。」

このシーズンが終る頃、窓外の遠近の樹木は、櫻も樺も銀杏もすべて黄葉しつくして、次に一斉に落葉するまでの或る一刻、樹木も雲も建物も含めたすべての景観が停止する。ただ赤白のだんだら模様の巨きな煙突の煙だけが、ゆっくりと西風に送られて左へ左へとなびいて行く、私の窓から見える静かな秋の終りである。それらの木々の落葉後、突然煙突の煙が真直ぐ上に昇り始めて景色の中央に直立する時が来る。死の宣言を思わせるいやな風景だ。死のイメージの中でも、“大事に

し合っていたもの同士が見覚えもなくなる”、という私が最もいやな考えが見えるのは耐え難いが、死はそういういやな意味のものではないようにと願うばかりである。

今は、私は生きていて、私が愛している花が吾が園から姿を消した事を悼んで名残り惜しく思っており、どこかに群生している姿を想像しつつたえる事ができる。一つは“庭ぜきしょう”の花である。3才ぐらいの頃、野原に咲き乱れている上で遊んだ時に愛し、以後今日に至る迄、どこかで群生している姿に逢ってはいつも変わらぬ愛を確かめ合った花。色も姿も綺麗なその花が、勤勉な庭師さんの芝刈機を毎年免れ乍ら十年も花を咲かせたのが、今年は終に花を見ることができなかった。もう一つは子供の頃、白い粉を吹いたような茎や葉が毒々しく思えて、特別に嫌いだったのに、今はその姿を探し求める程に好きになっている“たけにぐさ”である。菓草園の植込みに名札付きで植えてあったのが、教養部新棟が其の上に建って、公の居場所を失った。路傍の叢の中に時にその姿を見出す事ができる。(化学)

□ 夏休み中のお知らせ

夏期休暇中の開館、貸出等については下記のとおりとします。

1) 長期貸出

貸出期間 7月16日(月)～9月22日(土)
冊数制限はありません。

(但し、雑誌は対象外です。)

2) 開館時間

7月23日(月)～9月14日(金)

平日 午前9時から午後5時まで

土曜日 午前9時から午後1時まで

3) 閉館

8月13日(月)～18日(土) 一斉閉館の為

「私のスポーツ観」

武下正次

大阪港開港 120年を記念して「大阪・カップメルボルン⇄大阪ダブルハンドヨットレース」が開催された。

このレースにおいて、オーストラリアから出場したキリビリー選手のチーム（2人組）が、トップに遅れること、3日と20時間45分41秒、6位でゴールした。キリビリー選手のチームは、レースの途中で遭難したニュージーランド艇の救助に向かったために時間をロスしてしまった。

レース終了後、「救助か、レースの続行かで迷わなかったか。」というインタビューに対して、「海に出て救助信号を受ければ、コースを変更してでも救助に行くのが海上での鉄則であり、私たちは満足している。」とコメントしたそうである。そこで、このレースを主催した委員会は、救助にかかった時間をハンディとして認め、順位を6位から4位にした。その結果、4位だった日本人の選手（夫妻）は、「二人の選手はヨットマンの誇り」と心から大きな拍手を送った。という記事がありました。（朝日新聞より）

このような話は、いろんなスポーツの場で遭遇する機会があり、キリビリー選手の話もほんの一例にしかすぎません。「自分と同様、もしくはそれ以上の猛訓練に耐えてきた敵（相手）は、尊敬の念を持って接すべき人々なのだ」というスポーツマンシップが存在する一方で、「勝つことが、すべて」という考えもある。このような勝利、勝負に賭ける精神は、それなりに素晴らしいものがあると思

うが、それが全てになってしまうと、負けた大多数のスポーツマンやスポーツそのものが虚しくなってしまうのであろうか。

複雑化し、ストレスの多い現代社会において、勝負を犠牲にして人間性を優先する精神は、さわやかで心あたたまるものではないだろうか。このような精神に私も、大きな拍手を送りたい。

スポーツを愛好するひとりとして、気にかかることがある。最近の高校野球では、地元の選手だけのチーム作りから、他県からスカウトしてきた選手でレギュラーの大半を編成しており、勝利至上主義を是正しようという声もどこへ行ったやら、この傾向は増々、エスカレートしている。このような勝つために「モラル」を軽視したやり方は、高校野球だけでなく小学校においてすらも「勝った」「負けた」が全てであることが珍しくないという。

ある子供が、日曜日に早朝試合に元気よく出かけて行ったが、夕方、しょんぼりして帰ってきたそうです。親が、その理由を聞いてみたら「自分だけ一度も試合に出してもらえなかった。」と言う。そこで、この事をチームのコーチに話したところ「一生懸命に練習する子を試合に出したい。うまい子ほど一生懸命に練習する。子供達は、試合に勝ちたがっています。下手な子供を出して負けてしまったらかわいそうです。下手な子は、点数を競っているケースでは出せない時もあります。点差が開いてリードしている時なら出してあげられるんですが。」と答えたそうです。

私も、サッカーの指導をしているひとりとして、このような状況を多く経験してきました。そして、そのために退部してしまったり、スポーツから遠のいていった人を何人も見てきました。ですから、先程のコーチの立場（意見）も、小学校のチームが勝つために、たとえ少しでも子供を出してもらえないのは、おかしいのではないか。」という親の意見と両方とも理解できる。この問題の解決としては、その試合の目的、目標が楽しさを求めるレクリエーション的なものなのか、それとも勝利達成を目標とする競技的なものなのかを明確にすることだと思います。そうすれば、選手の出し方も異ってくるものと思います。

アメリカでは、子供にスポーツを指導する際、最初に教えることは、「スポーツマンシップ」で、後から技術の指導に入っていくと聞いています。

このように、精神的な面と技術的な面の両方のバランスがうまく一致したとき、はじめてスポーツの魅力と本質に出会うことができるのではないかと私は思います。（体育）

《豆 知 識》

探している文献が図書館でみつからない場合、あきらめずにカウンターで相談して下さい。必要とする図書や雑誌論文が当館にない場合には、他の図書館から取り寄せることができます。申込は、1階メインカウンターで。現物が届くまで、約1週間を要します。費用は、実費負担です。

□ 前期試験に備えて

1) 開館延長

7月7日、14日の両土曜日は午後3時まで開館します。

2) 研修室の開放

3階研修室を下記期間開放します。

6月18日(月)～7月21日(土)

時間 午前9時から午後7時まで。(平日)

3) 一部図書の貸出期限変更について

試験期になると、一部の図書に利用が集中しがちです。このため、予約の多いものに関し、一夜貸し、三日貸し等の措置をとることがあります。

□ 3階施設使用上の注意

図書館3階施設の使用申込は、事前に（原則として1週間前）1階メインカウンターでして下さい。その際、以下の注意事項を守って下さい。

1. 飲食・喫煙は禁止いたします。

1. 他の利用者の迷惑にならないよう、大声や物音を出すことは、慎んで下さい。

1. 施設の使用時間は2時間までです。

☆ 教養図書館現有蔵書数（単行本）と平成元年度貸出数

（平成2年3月31日現在）

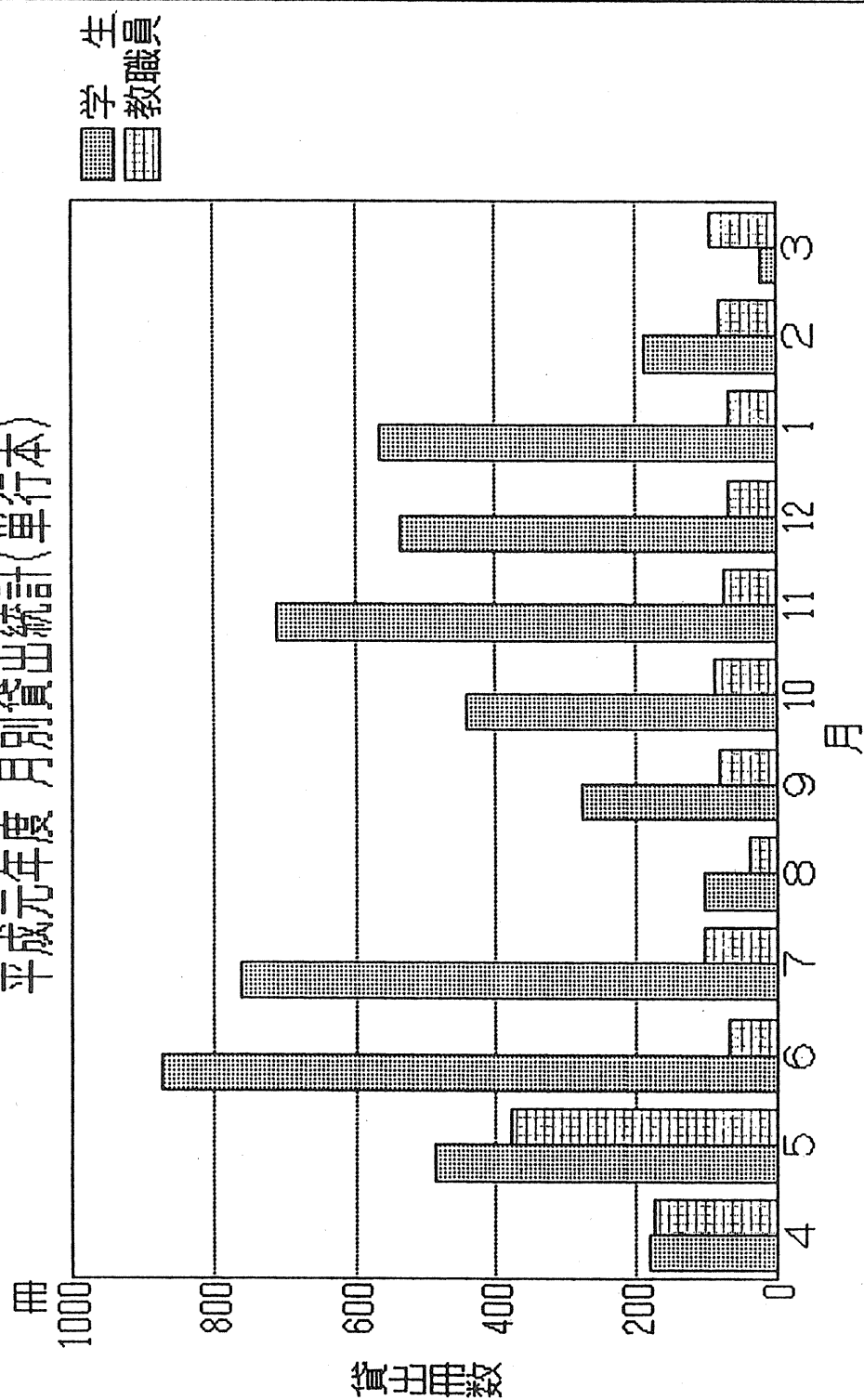
蔵書数 (冊)	比率(%)	主 題	N D C	貸出数 (冊)	比率(%)
4,494	6	総 記	000	77	1
6,388	8	哲 学	100	425	7
7,221	10	歴 史	200	417	6.5
10,485	14	社会科学	300	522	8
18,857	25	自然科学	400	3,051	47
2,287	3	工学・工業	500	123	2
1,086	1	産 業	600	34	0.5
4,801	6	芸術・体育	700	269	4
4,045	5	語 学	800	324	5
14,164	19	文 学	900	963	15
2,070	3	未 分 類	新 書 他	259	4
75,898	100	合 計		6,464	100

☆ 学年別・所属別の貸出比率

昭 和 63 年 度					平 成 元 年 度			
単行本 (冊)	雑 誌 (冊)	合 計 (冊)	比 率 (%)		単行本 (冊)	雑 誌 (冊)	合 計 (冊)	比 率 (%)
4,768	130	4,898	(82)	1 学 年	4,308	123	4,431	(82)
1,021	51	1,072	(18)	上 級 生	837	115	952	(18)
5,789	181	5,970	80.5	学 生 計	5,145	238	5,383	77
1,161	285	1,446	19.5	教 職 員	1,319	250	1,569	23
6,950	466	7,416	100	合 計	6,464	488	6,952	100

貸出数の比率は、昨年同様あまり変化が見られませんが、近年、貸出数が減る傾向にあります。また、数字で示される通り、皆さんが実際に手に触れている図書は、1割にも満たない数です。教養図書館にしかない多数の図書が、まだまだ利用もされずに眠っています。一年生の間に、より多くのジャンルの図書に触れてみませんか。

平成元年度 月別貸出統計(単行本)



第5回 なんじゃもんじゃの会だより

利用者と図書館との交流の場として活用できればと、昭和61年10月に第1回を開催してから、新館建設の為、昭和62年10月を最後にしばらく休会しておりましたが、「なんじゃもんじゃの会」の活動を復活させました。

今回は初めての試みとして、映画会を開いてみました。ポスターやチラシで呼びかけましたが、皆様には、どのように映ったでしょうか。

5月25日（金）午後4時30分教養図書館3階研修室に集合し、岡野先生（独語）の解説を伺った後、『秋のソナタ』（1978年スウェーデン映画）を約1時間半鑑賞しました。

以下、当日参加者の率直な意見を少し紹介します。

「息をのんで見ていました。とってもこわくて興味深くてすごく人間関係特に親子関係はたちきれないから難しいと感じました。将来母親になったらと思いました。言葉でかけないくらい大きな映画でした。ありがとうございました。（3N女子）

「難しい映画で、脳が汗をかいてしまいました。親子の関係を考えさせられる作品でした。このような素晴らしい作品をまた見たいです。」（1C男子）

「このような催しが大学にあると思いませんでした。いろいろな学科の人が集まっていると思うので、今度ぜひ各自の自己紹介などやってほしいです。」（1B女子）

「感動しました！私は、この映画で子供の気持ちに同感しました。あと何年後かに見たら、違う立場で、この映画を見られると思います。（1Z女子）

「親子であんなに真剣に話し合うことはすごいことだと思った。何かわからないけど考えさせられるものがあつた。人それぞれ立場とか考え方とかがあるから難しいことだと思う。（1V女子）

「よく見る映画と違って、娘と母親の感情が、複雑に絡み合っていて、考えさせられる映画でした。」（1B女子）



なんじゃもんじゃの会に参加して

化学科1年 吉田篤史

5月25日（金）、教養図書館で、なんじゃもんじゃの会に映画鑑賞の催しがあり、参加させて頂きました。数日前、図書館に行った際、この企画を知りました。僕は本来、金曜日の5限には講義が入っているのですが、偶然にも休講になって、ラッキーでした。

さて、その映画とは、1978年スウェーデンで作られた、イングリッド・バーグマンが出演している“HÖSTSONATEN（秋のソナタ）”という作品です。何年振りに娘のところへ訪れる、母親役のバーグマンは、著名なピアニストでした。演奏旅行のため、娘が幼い頃から家を開けていました。結局、彼女は家庭よりも自分の仕事を選び、そのことで、娘が母親の愛情に飢えてしまい、長い年月の間、両者に、深い溝ができたことが背景

にあります。何日か娘の家で過し、ある晩その過去のこと、激しい口論となり、互いの心理的葛藤を迎えて、この映画は終わります。決して、おもしろい話ではありませんが、どんな事があっても、親子の結びつきは強く、他人とは違う割り切れないものが、そこにあると感じさせてくれます。難しい映画でしたが、一度は見る価値のあるものだと思います。図書館にもあるそうなので、いかがですか。

最後に、この会は別に映画を見るためだけの会ではないそうです。様々な企画があるそうなので、またの機会を楽しみにしています。図書館が、独自にこのような文化的活動をしていただけることを、嬉しく思っています。図書館の先生方、並びに映画の解説をされた、ドイツ語の岡野先生、ありがとうございました。

お茶とお菓子を楽しみながら

好奇心が満たされる

そんな「なんじゃもんじゃの会」

第5回が5月25日（金）に
開かれます。

☆ 映画鑑賞の夕べ ☆

HÖSTSONATEN

“秋のソナタ”（1978年 ｽｳｴｰﾃﾞﾝ 映画）
解説 岡野先生（独語）

お茶とお菓子の準備がありますので、希望者は
教養図書館カウンターで申込をして下さい。

時間 16時30分から
18時30分まで

場所 教養図書館3階研修室

「なんじゃもんじゃの会」参加者から投稿がありました。今後とも多様な企画をこらしていきたいと思いますので、こうしてもらいたいとか意見や希望がありましたら、どしどし意見を寄せて下さい。また、呼びかけに応じて、多数の方が参加して下さいを希望します。

□ 表紙解説

藤 原 俊 朗

初等教育の全期間を通じて、我々は自然科学分野の解ける問題を学んできた。その結果、「全ての問題は、研究を続ければ、いつかは完全に解けるにちがいない」と信じたとしても不思議ではない。しかし、それは真実ではない。表紙は、そのことを最初に証明したクルト・ゲーデル（1906－1978）の写真である。

彼が証明したことは、「いかなる無矛盾の公理系においても、その公理系のなかでは、証明も否定もできない命題が少なくとも一つは存在する」ということである。これは「不完全性定理」と呼ばれ、上に述べた楽観的希望を葬り去るものである。この定理は、コンピューターの動作に置き換えるとわかりやすい。

1936年、アラン・マシソン・チューリングは、現在チューリングマシンとして知られる理論上の「万能計算機」を具体的に構成してみせた。これが「万能計算機」と呼ばれるのは、凡そ計算可能なものは全て計算できるからである。そのなかで彼は、「任意のプログラムとデータの組に対し、コンピューターがいつかは計算を終えて停止するのか、それとも無限に計算を続けて停止しないのかを決定する（「万能計算機」で計算する）ことはできない」ことを証明した。これは、みかけは異なるがゲーデルの「完全性定理」と同等である。このことは、「万能計算機」が「万能」ではないことを意味するが、しかし、いつかそれを越える計算機が登場することを期待し

てはならない。計算機が停止するか停止しないかを「自然科学的」に判別できるということは、その判別のための論理・手順が明確に記述できるということである。そして、その論理・手順が存在すれば、「万能計算機」の計算によって置き換えられるのである。

ところで、計算機の動作は完全に一意的である。すなわち、コンピューターにプログラムとデータを与えれば、その後のコンピューターの動作は完全に一意的に決定されている。しかし上で見たように、その動作を完全に知ることにはできないのである。

これらのことは、自然科学的に知り得ることに限界があることを意味する。ゲーデルは「知り得ないことが、必ずある」ということを、厳密に証明したのである。しかも上で見たように、「完全に一意的に決まっていることを知りながら、しかし全てを知り得ない」ということがあるのである。私はこの結論が恐ろしい。
(物理学)

〈参考図書〉

『ゲーデル』 竹内外史 日本評論社 1986
(289.3/G55)

『ゲーデルの世界』 広瀬健・横田一正
海鳴社 1987 (410.11/H72)

『ゲーデル、エッシャー、バッハ』 ダグラス
・R・ホフスタッター著 野崎昭弘等訳
白揚社 1985 (410.11/H81)

閲覧ニュース 61号

1990.7発行

北里大学教養図書館

〒228 相模原市北里1-15-1

発行責任者 手 塚 甫

電話 (0427) 78-8005